

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-3

画廊を基盤に、自ら発掘して育て上げた専属契約画家の絵画展示即売会を開いたりする田村は、因習的な洋画や日本画を扱う画商とは違って、現代美術を変革するギャラリストのパイオニアだった。

半年足らずの外回りで、朝倉の生来の営業センスが実を結び始めた。

支店長からも目をかけられるようになった矢先に、朝倉は誰に相談することもなく退職届を出して、田村の下でギャラリーのスタッフとして再就職してしまった。

真紀はこれまで朝倉との面識はなかったけれど、横田の仕事場に居合わせた時にかかってきた電話の話しぶりから、マネジメントしてもらっている画商の存在をそれとなく察していた。

横田も真紀もアドレス交換をしていたが、男の気質から推して使用頻度はきわめて低かった。

越前町への行き帰りにしても、写メを撮りたくなるシーンが何カットもあったはずなのに、真紀はマナーモードに設定した携帯電話を数回チェックしただけだった。

恋に落ちた時の真紀は、持ち前の対人関係能力を発揮する。

なんと申しまして、真紀はチェーホフの『可愛い女』の主人公（オーレンカ）のような女ですから。

愛車アウディTTクーペA3のように、真紀も心と体のメンテナンスをしてもらいたかったけれど、少し熱めのシャワーを浴びて自律神経を整えた。

ささやかな企みに持っていった数枚のCDをマホガニー材で作られた収納ラックにジャンル別に戻すと、目で追いながら迷うことなく真紀は、E・H・グリーグ作曲『ピアノ協奏曲イ短調作品16』ピアノ:レオン・フライシャー、クリーヴランド管弦楽団のCDを取り出した。

真紀はピアノ協奏曲を聞きながら、パンにハムとチーズをはさんでトーストしたクロック・ムッシュを作り、ストレートティーを入れて遅い朝食を取った。

折々の曲選びは、綿密に仕分けされた塊の中から、真紀の指向性アンテナによりピックアップされた。

不釣り合いに流されている音楽を案山子のように聴いていられるほどのタフな意識を真紀は持ち合わせていなかった。